埼玉県環境科学国際センター
～開設20周年を迎えて、これまでとこれから～

埼玉県環境科学国際センター　　立花　幹

1　20年の歩み

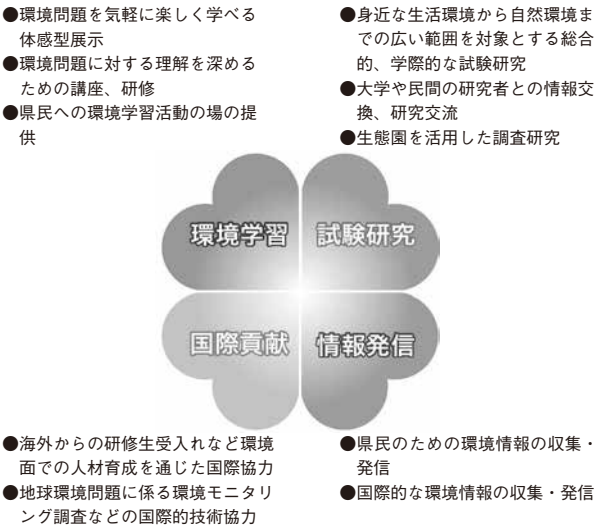
埼玉県環境科学国際センター（CESS:Center for Environmental Science in Saitama）は、平成12年４月に旧騎西町（現・加須市）に開設され、本年で満20周年を迎えました（図表1）。公害問題が解消されつつある中で埼玉県公害センターを発展的に解消し、身近な生活環境から地球環境まで、環境に関する総合的な課題解決を推進するという時代の要請に応える形で開設されたのが当センターです。幅広い課題に対処するべく、設立当時、地方環境研究所の主業務であった調査・測定試験研究だけでなく、「試験研究」「環境学習」「国際貢献」「情報発信」の４つの機能（図表２）を新たに設定したことにより、環境科学の総合的中核機関として、他県にはないユニークなものとなっています。

CESSは、４つの機能を遺憾なく発揮し、20年にわたり環境に関する課題解決に尽力してきました。具体的には、外部研究資金の積極的な導入、県民の環境問題への関心の高まりを受けた児童生徒向け環境学習や彩の国環境大学など県民各層へのアプローチ、大学をはじめとする共同研究や人的交流、中国・韓国・東南アジア各国などとの人材交流を通じた国際貢献など、特筆すべき活動を行ってきました。特に試験研究では、これまで多くの研究員が学術賞や論文賞、各種表彰を受けており、毎年100件以上の学会発表を行うなど日本でもトップクラスの研究活動を行っています。平成16年には、皇太子殿下（現天皇陛下）にも行啓いただくなど、国の内外からも活動が注目されています。

図表１　CESS沿革

年　月		項　　目
平成12年	4月	環境科学国際センター開設
	6月	早稲田大学理工学総合研究センターと研究交流協定を締結
14年	3月	埼玉大学と連携大学院に関する協定を締結
16年	11月	皇太子殿下（現　天皇陛下）行啓
17年	3月	文科省科学研究費補助金取扱機関の指定
20年	5月	立正大学環境科学研究所と研究交流協定を締結
22年	3月	展示館リニューアル（地球温暖化への対応）
	4月	研究所に温暖化対策担当を新設
	5月	展示館入場者数50万人突破
25年	4月	環境放射能担当を新設
29年	4月	化学物質担当と環境放射能担当を統合
30年	12月	地域気候変動適応センターを設置
令和２年	7月	展示館リニューアル（大型シアター設置）

図表２　CESSの４つの機能



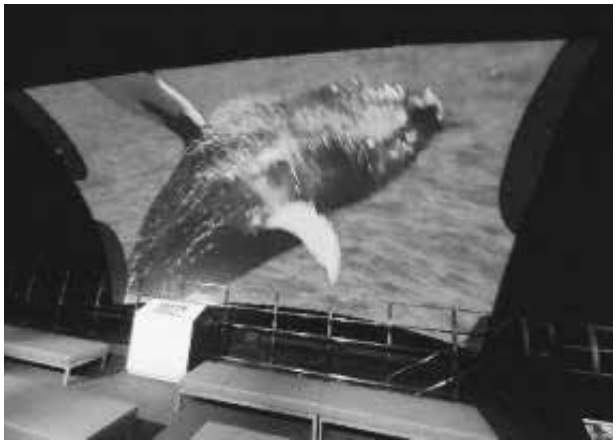
2　展示館リニューアル

CESSが20周年を迎えるに当たって、特に力を入れたのが、4つの機能のうち「環境学習」の中核となる「展示館」のリニューアルです。

子供から大人まで、楽しみながら環境が学べる人気の展示館は、最新の環境問題をより身近に感じられるよう、体感型の展示を更に充実させました。リニューアルの目玉は、直径12メートル、視界を覆いつくすほど巨大なドーム型シアターです。グローバルな環境問題を考える「地球環境編」と、身近な生き物の暮らしを体験して環境に親しみを感じる「生物環境編」の２種類の新しい映像を制作しました。「地球環境編」は、パズルのピースを効果的に使った映像でマクロな視点で地球環境の現状を知ることができます。「生物環境編」は、ドローンを使って撮影したトンボ目線の映像が楽しめます。トンボは「川の国埼玉」を象徴し、世代を問わず多くの人々に身近な生き物であることから、「子供から大人まで楽しみながら環境が学べる」というコンセプトにぴったりの映像となっています。

また、マイクロプラスチックなど最新の話題も取り上げるなど、展示物もパワーアップしました。従来から人気のあるエコドライブを学べるシミュレータ「チャレンジ・エコドライブ」など環境に優しい行動へとつながる展示も充実しています。

写真１：彩かんかんドームで流れる大迫力の映像



展示館の愛称は、公募による1,000件の候補の中から、明るい響きで親しみやすい「彩（さい）かんかん」を選びました。

写真２：「彩かんかん」全景

リニューアル工事後、当初は３月下旬にオープンする予定でしたが、新型コロナウイルス感染拡大に伴い７月１日に延期となってしまいました。しかし、リニューアルオープンの直前の６月28日には、展示館愛称を応募した方のうち最優秀・優秀賞の方の表彰式と、地元の種足小学校児童を特別招待してのプレオープンイベントを実施し、満を持してのリニューアルオープンは大変盛り上がりました。

リニューアルオープン後の７～９月の累計入場者数は8,029人で、前年比で約1.7倍（令和元年度７～９月入館者数は4,824人）となっており、今までより多くの方にお越しいただいています。

なお、リニューアルオープン後は、「彩の国『新しい生活様式』安心宣言」に基づき、展示館入館時の体温測定、マスク着用の確認、手指のアルコール消毒徹底など感染防止対策も徹底していますので、皆さんも、ぜひ一度お越しください。

写真３：プレオープンイベント時・表彰式の様子

3　環境学習のこれから

CESSの４つの機能のうち「環境学習」は、展示館リニューアルにより大きなパワーアップを果たしました。今年度は、新型コロナウイルスという予想していなかった事態の中でのリニューアルオープンとなりましたが、夏休み特別企画、秋の特別企画などをチームメンバーとともに考え、果敢に実施してきました。これまでの20年間の累計センター利用者数は96万人で、いよいよ100万人の大台が見えてきています。

私自身は今年度異動してきたので、実は「CESSのこれまで」には関わっていませんでした。正直に言えば、異動を告げられた時に「CESSってどこにあるの？」という認識だったくらいです。そんな私だからこそ、チームメンバーと共に考え、作っていける「CESSのこれから」があると思っています。

「CESSのこれから」を考える上で、大きな課題は二つあります。一つはセンターの認知度向上です。私自身が知らなかったように、埼玉県民の中でもCESSがどこにあるのか、どんな施設かを知らない方が多いのが現状です。CESSが加須にある、そして環境に興味を持ってもらうためのきっかけを提供していることを知ってもらうことが必要です。

令和元年度のCESSのホームページのアクセス数は約16万件、Facebookのリーチ数は約２万件、直接来館される方は約4.5万人でした。合計すると22.5万アクセス。これを仮に埼玉県民720万人で割ってみても、３％程度の人しかCESSのことを見てくれていないことになってしまいます。このため、年間アクセス数を50万まで増やしていくことをCESSとしての目標としました。

倍以上のアクセス数とするわけですから、今までの延長線上だけでは駄目で、新しいチャレンジが必要です。そこで、今年度は新型コロナウイルス感染拡大のため休館となっていた期間に、YouTubeに「CESSチャンネル」を開設し、リニューアルした大型シアターの紹介動画などの配信をスタートしました。今では、研究員の方からも動画を提供してもらい、「セミの抜け殻の見分け方」など視聴の多いものも増えてきました。

また、Facebookを使った発信では、従来のイベント情報などの発信に加え、センター長が自ら広告塔になりウィットに富んだメッセージを配信する「松ケン主将のほぼ日刊CESS日記」や、CESSの樹木医が悲喜こもごもの体験をつづる「樹木医タケちゃんの生態園日記」を発信しています。両日記とも一読の価値あり、ぜひご覧ください。（生態園：ビオトープ手法で整備された調査研究のためのフィールド。2.2ヘクタールの園内には野鳥や昆虫など多数の生物が生息しており、一般公開もしているため、散策しながら季節の移ろいを楽しめる。）

YouTube「CESSチャンネル」　CESS公式Facebookページ

さらに、令和２年12月からは、インスタグラムを活用した生態園の動植物の画像の配信も始めました。また、小学生などから集めた環境科学に関する質問を研究員がホームページで答える取組なども企画中です。

もう一つの課題は企業や地元との連携を深めていくことです。プレオープンイベントでは、CESSがこの地で開設20周年を迎えたとの原点に立ち、地域の種足小学校児童を特別招待するなど、地元の方にCESSをより知ってもらう取組を行いました。研究員による出前講座や社会科見学など、地域の学校とのつながりを深める取組も推進していきたいと思います。また、企業との連携については、研究部門では「研究シーズ集」を発行してCESS発のシーズを事業化に結び付けようとする取組を行っています

が、「環境学習」の視点でどんなことができるかいろいろ考え、センター内で議論しているところです。

その他の取組として、CESSでは、「身近な環境観察局」として、県民参加型で環境に関する調査を行っています。調査対象は、サクラなどバラ科の樹木を枯らしてしまう外来害虫である「クビアカツヤカミキリ」の被害が出ていないかを、自宅や近隣で調査・報告してもらうものや、アサガオの種をお渡しし自宅で育てながら葉にあらわれる光化学スモッグ兆候を報告してもらうものなどがあります。身近な環境観察局の参加者は、県内の個人、学校の科学クラブなどが多いのですが、企業の方にも環境観察局に加わってもらうことで、企業の従業員や企業の店舗を訪れるお客さんが環境を考えるきっかけにつながります。工場や店舗の敷地にサクラの木があることも多い企業に環境観察局になってもらい、クビアカツヤカミキリの調査をしてもらい、県としても協力企業をPRするなどしてバックアップできるのではないかと思っています。

写真4：クビアカツヤカミキリ

「CESSのこれから」に向けて、チームメンバーとともに考え、CESS開設20周年となる今年が、次の20年を創る第一歩の年であったと、20年後の誰かが思ってくれるよう、今後も取組を進めていきたいと思います。

参考文献

◎埼玉県環境科学国際センター報　各号（埼玉県環境科学国際センター発行）

◎埼玉県環境科学国際センターニュースレター　各号（埼玉県環境科学国際センター発行）